
貴方に贈る花

桐谷瑞香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方に贈る花

【Nコード】

N8452V

【作者名】

桐谷瑞香

【あらすじ】

——花と一緒に何を贈りますか？

おおさき花屋と出会った咲季は、店長の修二郎に良くしてもらい、機会がある度に訪れるようになる。そこでの店長と孫の雅幸との交流——そしてその花屋を経営し続ける修二郎の想いとは——。花に願いを込めた短編現代小説。

一、親しき人に感謝を

花と一緒に、あなたは何を贈りますか？

しばらく雨を降らしていた雲がどこかに流れ去り、久々に太陽をこの目で見た日だった。

その日の天気予報では、気温がだんだんと上昇し、五月初旬のこの季節にしては汗ばむような陽気になるだろうと言っていた。その予報はまさに当たり、私は自転車を漕ぎながら、燦々と輝く太陽に照らされ続けている。

高校の部活が昼過ぎで終わり、友達と昼食を共にした後の帰り道。機嫌よく家に帰ろうとしたが、ある程度進んだところで、唐突にブレーキをかけた。

たった今、思い出した。今日ある記念日の存在を。

慌てて手帳を取り出し、今日が何の日かを確認し、そこに書かれているコメントを見て、自分の不甲斐なさに思わずうなだれた。

小さい頃から毎年必ず何かをプレゼントをしていた、五月の第二日曜日。――すっかり母の日の存在を忘れていたのだ。

すぐに自転車の進行方向を変えて、駅ビルへと向かおうとした。だが、その前に念のためにと財布を取り出し、中身を確認する。そして見た瞬間、顔をひきつらせた。お札が一枚も入っていないのである。小銭をかき集めても千円にも満たない。高校二年生の財布の中身としては、悲しすぎる状態だ。

デパートに駆け込み、ハンカチやエプロンを値段も見ずにレジに持って行かなくて良かったと、胸をなで下ろした。

これはどこかの花屋に行つて、質より量の花束を作ってもらえないだろう。けれど、知っている花屋は駅近くにある少し高めな

チェーン店のみ。あそこは可愛らしく、華やかな花束を作ってくれるが、このなけなしのお金で買えるものはたかが知れているだろう。それでもないよりはいいだろうと思い、駅に向けて自転車を走らせ始めた。

この道から駅は行ったことがないため、ちよつとした探検になる。少し自転車を漕ぐ速度を落として、気分転換に周りの景色を見渡しながら進む。犬を飼っている家、小さな畑を作っている家、明るい色の屋根や瓦屋根など、どれも独自色が強い住宅街だと感じた。

多少、車は通るが、一方通行の道のため、前方から来る車のみ注意していればいい。

ふと鉢に植えられている花が視界に入ってきた。それは何鉢もあり、どれも綺麗な花が咲いている。赤色や紫色、オレンジ色の花など、知っている範囲ではマリーゴールドが植えられていた。

その花たちにつられるように鉢で溢れる建物の前に自転車を止め、顔を上げると？おおさき花屋？と書いてある少し古びた看板が目に入った。そう私の目の前にあるのは、小さな花屋さんだったのだ。

鉢が多数置いてある先にはガラスドアがあり、店内が透けて見えた。水を張ったバケツの中に、花束などに使う色とりどりの切り花が何本も入っている。

そして真っ赤なカーネーションも入っており、それが私の目を引く。数本残っているのだ。

思わずガラスドアに近寄って、中を覗き込む。数えてみると五本ほどある。財布の中身と相談すれば、全部とは言わなくても何本かは買えるだろう。

「どうかしましたか？」

後ろから突然話しかけられて、飛び上がりそうになった。慌てて振り返ると、七十過ぎだろうか、少し背骨が曲がったおじいさんが立っていた。

「お客さん？」

その問いに素直に頷く。すると背骨を真っ直ぐ伸ばしたかと思う

と、嬉しそうにドアプレートを？CLOSE？から？OPEN？にして花屋のドアを開いた。

「そうか、そうか、どうぞゆっくり中を見て下され。小さなところだが、花の品質には気を配っていますので」

そして近くにかかっていたエプロンを着ると、そこら辺で歩いているおじいさんから、あつという間に花屋の店員へと様変わりする。

正直、ちょっと驚いていた。このおじいさんが花屋の店員であったとは。確かに店の外観は飾り気がない点から男性が店の者であるかもしれないと思っていた。いつも買っている駅前の花屋は、綺麗なお姉さんの店員が多かったため、その影響もあって感じたことだろう。

私はおじいさんに促されながら、店の中に入った。中は狭く、切り花が入っているガラスケースが三分の一を占め、その脇に鉢が何個か置いてある。そして唯一ある机の上には透明なフィルムや柔らかな素材でできた様々な色の紙があった。床には切られた茎や葉が乱雑に落ちている。

「何か希望とかはあるのかい？」

にこにこした表情でおじいさんは尋ねてくる。白髪で、顔もしわでいっぱいだが、表情から生き生きしているという印象を受けた。

「母の日用に花束を作って欲しいのですが……」

「それじゃあ、カーネーションだね。予算は？」

おじいさんがガラスケースを開くと、そこにあったカーネーションをすべて取る。

私は寂しすぎる財布の中身を思い浮かべた。お小遣いを貰う日まで、まだ一週間はあがあるが、この場合はギリギリまで使い、その後はどうにかお金を使わない方向で頑張ろうと誓う。

「八百円くらいで、できますか？ 値段以上に豪華な感じにして欲しいです」

「もちろん充分できる。少し待っていないさい」

そう言うと、ガラスケースの中にある花を見定めて、カーネーシ

ヨンと色合い等を照らし合わせる。どれがカーネーションの魅力を引き立たせるか見ているようだ。

何種類か合わせたが、結果的に黄色くて小さな花とカスミ草が、カーネーションを包み込むように取り入れられた。淡い色に囲まれているため、赤が映えてとても綺麗である。

それを適切な長さに茎を切り揃えてまとめ、柔らかな素材の包装紙と透明なフィルムで包み、最後はリボンを巻いて完成だ。カーネーションが全部で五本の可愛い花束ができあがった。

「それじゃあ、お会計を」

そう言われて、慌てて財布を取り出した。

「五百円でいいよ」

「え、この花束で、その値段？」

予想外の値段に思わず反射的に返してしまう。記憶が定かではないが、カーネーション一本は最低でも百円以上した気がした。黄色い花まで入れられているのに、そのような値段なんて、安すぎるのではないだろうか。

そんな私の心中を察したのか、おじいさんは微笑みながら花束を手渡した。いい香りがし、見ただけで落ち着いてくる。

「せっかくの母の日だ、少しでも豪華な方がお母さんも喜ぶだろう。それに新鮮な花をなるべく早くお客様の手に渡った方が、花たちも嬉しいだろうさ」

そう言われて改めて花に目を向けると、その花束はいつもより瑞々しく、美しく見えた。これを一刻も早く誰かに贈りたいという気持ちになる。

おじいさんの好意を無駄にはいけないと思い、それ以上は何も言わずに、五百円玉を差し出した。

「ありがとうございます」

お金を受け取られながら言われ、少し気恥ずかしくなった。それに対して気を紛らわすかのように、思わず別の話題を振ってみる。

「おじいさんは、ここですっと花屋さんを？」

一方通行ではあるが、車や人の往来は割とあり、存在していると便利な道である。だが、この場所で商売をしても、駅前の花屋の売上には到底敵わないはずだ。

「定年してから始めたから、十年から十五年くらい経ったはずだ」

「そんなに長くやっているのですか」

通学路として近くの道を使っていたが、未だに知らなかったため、思わず驚きの声を出してしまう。

「住宅街の片隅で、往来も最近までは激しい場所ではなかったから、ひっそりとやっていた。だが最近が開発のおかげで、有難いことにお客さんが増えてね、孫に手伝わってもらわないと注文に間に合わない。今日も配達を頼んでいる」

おじいさんが目を細めた先にあるのは、工事中のマンション。完成するのは来年の、ツインタワーマンションを建築している。駅から十分ほどのところにあり、ベットタウン化が進んだこの地域に、多くの人々が流入するようになったため建築を始めたらしい。

「そうですか。たくさんの方が買いに来て、良かったですね」

「少しでも多くの方が花を見て喜んでくれれば、これ以上に嬉しいことはない」

うつすらと笑み浮かべながら呟かれる。その控えめな様子から、この花屋全体の雰囲気のようなものが察することができた。

やがて花束を抱え、外に出て、自転車に乗り込んだ。

「ありがとうございます。また機会があれば是非来ますね」

「こちらこそ、ありがとう」

おじいさんに見送られながら、私は家へ向かって自転車を漕ぎ始めた。少し走ったところで振り返ると、まだおじいさんは立っている。なんて客想いの人なのだろうかと思いつながら、早くお母さんに花束を渡したいと思い、全速力で漕いで行った。

その後、お母さんが素敵なた束だと喜んだのは言うまでもない。

二、明日に導く道を

＊ ＊ ＊

やがて？おおさき花屋？と出会ってから、四年近くが経過し、私は大学三年生になろうとしていた。その間にも幾度となく花を買いに行き、素敵なお花束を作ってもらうだけでなく、時々おまけとして小さな花束を頂いたりとすっかり顔馴染みになっていた。

店長のおおさきしゅうじろう大崎修次郎おじいさんは七十代半ばであり、歳を重ねるにつれて体力的にも衰えてきているため、あまり長時間店を開けていないが、表情はいつ会っても元気そうに見える。

普段の店の開店状況としては、平日は修次郎おじいさんが頑張つて半日程度開けており、休日は主に孫の雅幸まさゆきさんが店頭に出ている。花についての研究をしている、私より二つ上の大学院生だ。昔から花が好きで、おおさき花屋によく遊びに来ていたらしく、修次郎おじいさんの花の選び方や切り方の癖などもほとんどわかっているらしい。

「おじいちゃん、この花屋は老後の楽しみで始めたものだから、誰かに継がせる気はないと考えているらしい。ただ最後まで花に触れていたから、生きている間は手伝ってくれたら有難いと言われて、手伝っているんだ」

頼ってほしいという想いもあるのだろうか、少しだけ寂しそうな顔をしながら、そんな内容の話をしたこともある。当初は二人とも言葉数は多い方ではなかったため、会話は弾まなかったが、今では日常だけでなく、お互いの専門分野を聞きあったりしている仲にまでなっていた。

雅幸さんと初めて面と向かって会ったのは、大学に入学が決まった時のことだった。入学式の前日に、彼がおじいさんの代わりに花束を宅配してくれたのだ。三月末にお母さんの誕生日があり、花束を贈るために花屋に訪れていたのだが、その時の会話の中で何気なく入学式のことを漏らしていた。それをおじいさんが覚えていたため、そのようなサプライズを実行してくれたらしい。

「花にはそれぞれ花言葉があって、この花束に入っているものはすべてそれを意識して入れたと言っていた。とは言っても、人によって解釈は色々で、一種類の花でも何個も意味はあるけど。例えば、このピンク色のふわふわした、蝶みtainな感じの花はスイートピーと言って、？門出？という花言葉がある」

「門出。そうなんですか……」

修二郎おじいさんの受け売りを雅幸さんは少し気恥ずかしそうに言いながら、様々な花で作り上げられた花束を渡してくれた。花言葉を踏まえて作ってくれるなど、おじいさんは思った以上にロマンチストなのかもしれない。

「綺麗な花束ですね。こういうのをプレゼントされるの、とても嬉しいです」

花の匂いを嗅ぎながら、頬を緩ませる。卒業式の日の後輩たちからも貰ったが、それ以上に感慨深いものがある。

「おじいさんに、ありがとうございますとお伝え下さい」

その花束を花瓶に生けると部屋全体が明るくなったような気がした。大学という新たな生活を迎えるに当たって不安もあったが、それを見ているだけで、少しは前向きに進めそうだった。

それから二年経ち、この春休み、私の心の中は言葉で上手く表すことができない不安に覆われていた。

春休みの予定はバイトにサークルに明け暮れるつもりであり、悩んでいる時間などない。そのはずだったが、ある日の友達との会話

がきっかけで立ち止まってしまった。

「短期だけど、語学留学してくる。外国の文化に触れてみたいし」
「私も！ こっちはただの旅行だけど、のんびり海外で時を過ごしてみたいんだ」

その話を適当に相槌を打って返す。その話を聞かされたのが年末だったが、いつも一緒にいる友達が海外にそこまで視野を広げているとは思わなかった。

他の人にも予定を聞いてみると、帰省する人はもちろんのこと、音楽系サークルの卒業公演や新歓の準備、はたまたインターンシップに出る人など、いつもの休み以上に充実している人ばかりである。何も考えずに、去年と同じような内容で過ごそうとしていた私にとっては、行動力のなさに痛感していた。

大学ももう折り返し地点。将来のことなど何も考えずに、毎日授業や課題、サークルにバイトに時間を流していたのを、後悔し始めていた。

今ならまだ戻ればいい、あの様々な希望とやる気で満ち溢れた、大学に入った当初に。

そして、なぜここで勉強しようと思ったのかを思い出せばいい。だが、それをしてしまったら、二年間を否定するような気がしてならない。

本音を言ってしまうと、怖かった。そのまま何も気が付かなかったことにして、毎日を淡々と過ごし、新年度を何となく迎えて、また皆と同じような忙しさで時を過ごしたい。だから、それまでは心の中に表れている感情を外に出さないために押し留めようとしていた。

そんな三月の終わり、ぼんやりと駅の階段を上っている時にその人たちと出会った。それはまったくの偶然であるが、双方にとっては幸運な出来事でもあった。

視線を下げて、足元を見ながら階段を上っていたが、ふと視線を上に向けると、チェックの帽子を被ったおじいさんが手すりを使い

ながら上っている。回り道をすればエスカレーターもあるのに、わざわざ上るとは意外に元気な人だ。

その横を素通りしようとしたとき、不意におじいさんの体がよろめく。その後にかかることが瞬時に脳裏をよぎり、とっさに後ろから支えた。

ほんの少し足がもたついただけであつたので、それ以上状況は悪化しなかった。ほっと一安心し、息を吐き出す。

「すまないね、ありがとう」

お礼を言いながら振り返ったおじいさんの顔を、私は正面から見る形になった。そこで二人とも目をぱちくりとする。

「おじいちゃん、こんなところにいた！」

聞き覚えのある声に二人して振り向くと、焦ったような表情をしている青年が階段を駆け上ってくる。

「出かけるのはいいけど、もつと自分の年齢を考えて。何かあったら、救急車だけでは済まないんだよ！」

「すまん、雅幸。お前が忙しそうだったし、去年も一人で行けたから大丈夫だと思い」

「もう用は終わった。勝手に一人で行かれるのも困るんだよ。だから一緒に行こうか」

苦笑して、近づいてくる青年は、既に顔を真正面から見ていたため、すぐに雅幸さんだと私はわかっていた。そしてこちらの老人は少し洒落た格好をしているため、後ろ姿だけではわからなかったが、顔を見るなり修二郎おじいさんだと判明していた。

雅幸さんと視線が合うと、彼も目が点になっていた。ようやく気付いたらしい。

「咲季ちゃんじゃないか」

「こんにちは、雅幸さん、そして修二郎おじいさん」

挨拶はしたが、しばらく意図的に店には訪れないようにしていたので、思わず視線は下がり気味になってしまう。だがそんな気持ちなど関係なく、爽やかな笑顔を向けてくれた。

「ありがとう、おじいちゃんを支えてくれて。目を離すと、一人でどこかに行ってしまう困った老人だね」

「実の祖父に対して、困った老人とは何事だ」

「現に危険な状態になっていたじゃないか」

これ以上の追従は許さないと言わんばかりに、ぴしゃりと言い返す。階段の途中という中途半端なところで出会ったため、通行の妨げを回避するために、とりあえず上りきった。

「それで、どこに行くつもり？」

しっかりとした足取りで駅の構内を歩き始める修二郎おじいさんの横から、雅幸さんは話しかける。成り行きで私も後ろを付いていた。

「数駅先にある公園だ。今が見ごろだから、是非とも行ってみようと思った」

「ああ、あの公園の桜並木ね。言ってくれば車を出したのに。しようがない、ここまで来たから電車で行こう」

桜と聞いて、一瞬胸が高鳴った。毎年大学内の桜を散歩がてら見る程度で、その公園の桜はじっくりと見たことはない。近くなのだから勝手に行けばいいものだが、そこまで踏み出そうという気力はなかった。

そして改札の前で立ち止まると、雅幸さんは体をこちらの方に向ける。

「咲季ちゃん、さっきは本当にありがとう。これから電車に乗って、桜の方を見に行くから、ここでお別れ。休日ならたいいは店を開けているから、また来てね」

「はい、ありがとうございます。それでは、また」

そう言って、背を向けて改札とは逆側の方向に歩き出した。ほんの少し期待していた言葉があったが、それはかけられなかった。

今日の予定は少し駅ビルをぶらつく程度、今、会ったのは、ただの偶然。それを無理に繋げなくてもいい、そう思った。

「咲季ちゃん、ちょっと待ちなさい」

しわがれているが、有無を言わせない口調で呼び止められる。けれども、その言葉を出した本人は穏やかな表情をしていた。

「なんですか、修二郎おじいさん」

「時間はあるかい？ もしあるのなら、気分転換にでも一緒に桜でも見に行かないか。この老いぼれと細かい男とで良ければ」

雑踏の中だが、その言葉は確かに私の耳に入ってきた。微笑を浮かべながら誘ってくる様子。思いもよらない、おじいさんからの誘い。

曇りきった心を突きぬいてきたような内容に、自然と首を縦に振っていた。

電車を十分ほど乗り、ある駅に降りると、駅の構内から、造花の桜がところどころから飛び出していた。自然に飾り付けられており、既に心が明るくなるような光景だ。

駅を出て、歩く人々の流れに乗りながら、その後を付いて行く。やがて隣にいた修二郎おじいさんに促されて、顔を上げると視線の中に大量の桜が飛び込んできた。

予想以上の美しさに目を丸くし、思わず感嘆の声を漏らす。

「綺麗……」

歩き続けると、少しずつ近づいてくる、のびのびと咲いている桜たち。

ただ本数が多いだけの公園かと思ったが、それ以上に長年ここで咲き続けているのが売りらしい。その年月をかけた分だけ、様々な方角に向いて桜は咲いている。

やがて桜並木をくぐりながら、ゆっくりと頭上に広がる、優しい色の桜を目で楽しむ。

心の中が少しずつ洗われるような気がしてくる。自分自身の中で渦巻いていた後悔や苦しみが、なぜだがり除かれて気分が楽になり、曇っていた心の中が明るくなってきた。

これを人は癒されているというのだろうか。桜という、年に一度

しか花開かない樹に対して。

そして同時に感じるのが、何年も美しさを保ち続けて、咲き続けている存在感である。桜たちがどんな人生を歩んでいるかは知らないが、この瞬間に輝いているのは確かであった。

「たまには外に出て、色々な花を見るのもいいだろう。切り花ではどうしても限界がある。それに焦った時は、自然に触れるのが一番なものだよ」

「そうですね。こんなに大きく、美しいものはそう簡単に見られるものではありませんからね」

風に吹かれると、桜の花びらが落ちてくる。それがまた絶景であり、いつしか私は顔をほころばせながら、舞い散る桜を心の底から楽しんで見ていた。

それを修二郎おじいさんはにこにこしながら、花びらが作った道を歩いていた。

三、日々の元気を

＊ ＊ ＊

桜並木をじっくりと時間をかけて歩いた後は、私の心の中にあつた不安や迷いは多少減っている。確かに自分の行動の遅さにもどかしい気分にもなってしまうが、それでも「着実に進むことが重要だ」と後に修二郎おじいさんに言ってもらったことが、すごく励みになっていた。

そんな中、数か月経った初夏、ある花束を注文するために、いつもの調子で私は花屋へと向かっていた、何も知らずに。

梅雨も明け、まだ夏も本格的に始まったばかりであるのに、すでに暑く照りつけるような日差しが続いている。幸い今日の空は雲で覆われているため、直射日光で苦しめられるようなことはないが、蒸し暑いのは相変わらずだ。天気予報では夕立があるだろうと言われている。それによって少しはこの暑さも和らぐかもしれない。

自転車を走らせて、花屋まで向かう。だが途中で信号が赤であったため、ブレーキをかけた。大通りのため、信号が変わるのに少し時間がかかりそうだ。早く変わらないかと待っていると、前方にいた日傘を差している二人のおばさんの会話が聞こえてきた。

「ねえ、知っている？ この先にある道、二車線になるんですって」「あら、両側の道から車が通れるって言うこと？ それは便利になりそうね」

一方通行から二車線になれば、迂回する手間も省けて便利になる。思わぬところでいい情報を得ることができた。これでよりおおさき花屋に人が入るだろう。

信号機を見れば、そろそろ赤から青に変わりそうだ。ペダルを踏んで、走り始める準備をした。まだおばさんたちの会話は続いている。

る。

「けどね、道を広げるといのは、敷地が必要。だから、この道沿いにある家やお店は移転してもらって解体するそうよ」

「あらまあ。そんな目に合わなくて良かった。いくらお金を出してくれると言っても、住み慣れた家を離れるのは嫌だわ」

さらりと出された驚きの内容に、動かそうとした足が止まった。

二人のおばさんは信号が変わると、何事もなかったかのように横断歩道を歩き始めた。その背中をただ呆然と眺める。

「立ち退き……、花屋も？」

そう呟くと、血相を変えて一目散にペダルを漕ぎ始めた。勢いよくおばさんの横を通り過ぎると、怪訝な顔をされていた。そんなことも構わず、必死に漕ぎ続ける。ものの数分で到着するが、今は一刻も早く修次郎おじいさんに会いたかった。

そして見えてきた花屋の入り口を見て、目を丸くした。少しずつ速度を落とし、入り口の前に止まると目に入ってきたのは、閉まったシャッターの上に貼られている張り紙であった。

『申し訳ありませんが、しばらくの間、臨時休業とさせていただきます。』

達筆に書かれた文字は修次郎おじいさんの字だ。だが突然の休業に驚きを隠せない。ここ数週間は顔を出していなかったが、その間に――。

「咲季ちゃん？」

突然名前を呼ばれて、すぐに振り返る。そこには買い物袋を手にした、雅幸さんがきよんとした顔で立っていた。

「どうしたの、そんなに怖い顔して」

驚きの出来事が続いたため、眉間にしわが寄っているのだろう。慌てて笑顔を無理矢理振りまく。

「いえ、ちょっと暑い中、自転車走らせていたら、疲れてしまっ
て。あの、この張り紙の意味は……」

ちらっと視線を送ると、雅幸さんは閉まっているシャッターの前

へと近づいた。

「そのままだよ。おじいちゃんが熱中症で倒れて、しばらくの間入院することになったんだ」

「入院！」

「そこまで酷くないから。ただ歳が歳だから、様子を見て入院しているだけ。心配しなくても大丈夫。今日だって、花瓶に花がないのは寂しいのだから、色々とぼやいていたし」

そう言いながら、鍵を取りだし、シャッターに付いている鍵穴に差し回した。そして持ち上げると、シャッターの下からガラスドアが露わになる。そしてその奥には残された花たちが賢明に生き続けていた。

「どうにか維持し続けられている状態か。鮮度は落ちてしまっているけど、まだいい方だろう」

店の中に踏み入れると、ガラスケースを開け、そこから花を何本か選び抜き、簡易包装をして再び出てきた。向日葵も入っている明るく夏らしい花束だ。

「ちょっと持っていてくれる？」

「は、はい」

雅幸さんから花束を受け取ると、彼は慣れた手つきでシャッターを閉め始め、あっと言う間にさっきの状態に戻した。本当に花だけを取りに来たらしい。

おじいさんの具合が悪いというのはどれくらいだろうか。思案を巡らすのが、想像が上手くできない。そんな挙動不審の私を見た雅幸さんは優しい声を掛けてくれた。

「そうだ。今からこれを持って見舞いに行くんだけど、一緒に行く？ おじいちゃんに会いたがっているみたいだし」

「よろしいんですか？ それならば是非ともご一緒させてください！」

元気よく、はっきりと答えると、雅幸さんは嬉しそうに頷いた。裏に止めてある車に、花束と共に助手席へ乗り込んだ。雅幸さん

も運転席に乗り込みエンジンを入れると、ゆっくり動かし始めた。

「車で十分くらいの場所だから、すぐに着くよ」

そう言いながら音楽を流し始めた。私でも知っている有名な歌手の歌だ。

音楽を聞きながら、移りゆく車窓を何となく眺めた。

神社へと続く道には変わらず木が並んで立っている。しかしその後ろの方に見える高層ビルは幼い頃にはなかったものだ。そこは開発地として更地であった場所だが、今ではもうその面影はどこにもない。

いつしか人々は流入し始め、必要がなくなり取り壊された建物の跡に、マンションやビルが新たに建築されていく。それが何か所もあり、気が付けば駅まで続く道にはたくさんの方のマンションが建っていた。

変わらないものなど何もないのだと、少し寂しく思ったときでもある。

なら？ おおさき花屋？ もいつかは変わってしまうのだろうか。さっきのおばさんたちの会話が頭の中で反芻する。果たしてあの話が本当なのだろうか、躊躇いつつも尋ねようとした。

「雅幸さん、あの――」

「ほら、ここの病院。道が空いていたおかげで、早く着けた」

雅幸さんの声に遮られて、言うタイミングを失ってしまった。車内からは少し古びた三階建ての病院が見える。そこは町の中にある病院として、今日も多くの人々が出入りしており、何度も自動ドアが開け閉めされていた。

駐車場に止めて、外に出ると、空はどんよりとした雲で覆われている。湿気がひどく、さらに蒸し暑く感じ、それから逃れるように急いで病院の中へと入った。思った通り人々で中は溢れており、診察を待つ人で座席はいっぱいだ。

それを横目で見つつ、入院患者がいる三階へと進んでいく。慣れない空間に少し落ち着かなかった。

やがてある大部屋の前で止まると、雅幸さんは奥の方に視線を向ける。それを追うと、修次郎おじいさんが起き上がって、外の様子を見ていた。

「おじいちゃん、起きていて大丈夫なの？」

他にも入院患者はいるが、声を掛けながら遠慮なく中に踏み込んでいく。雅幸さんを見つめる周りの目は、誰もが穏やかな目をしていた。

「今、昼ご飯が終わったばかりだ。おや、後ろにいるのは咲季ちゃんかい？」

丸くされた目が向けられる。おどおどしながらも、軽く頷いた。

「お久しぶりです。たまたま雅幸さんと会った際に修次郎おじいさんの入院のことを聞き、様子が知りたくて着いてきました。突然の訪問、すみません」

「いや、むしろこんなところまで足を運んでくれて、ありがとう。そして老いばれ爺のことも心配してくれて」

視線が顔から手元へと移動される。その理由に気づき、大切に抱えていた花束を手渡した。

「雅幸さんが持ってきたお花です。花瓶に活けますか？」

「いや、それは雅幸にやらせよう。良かったら、話でもしていいくれないか？ やはり若いお嬢さんと話す方が楽しいからね」

「おい、おじいちゃん……」

雅幸さんが呆れたような声を出している。だが修次郎おじいさんは何も言わずに、花束を突き出した。それを渋々と受け取ると、机の上にあった花瓶を手に、病室から出ていった。

「これで少しは静かになったかな」

にこにこしながら入り口の方を眺める修次郎おじいさんに、そつと言り返す。

「せっかく来て下さっているのに、その言い方はないと思います」「夏休みだからか、毎日来ているのだ。たまには違う人とも話したい」

「入院して、長いんですか？」

車に乗っている時間が短かったため、雅幸さんからあまり奥まった話は聞いていない。

「そろそろ一週間というところだ。まだ検査もあるから、退院はもう少し先だが。まったく年寄り扱いをしおって」

その言葉に苦笑いをしながら聞き流す。もう八十近い高齢。この暑さのせいでまた同じようなことが起こったら非常に困るだろう。なるべくなら、家族としては病院にいてほしいはずだが、それは本人にとっては不満のようだ。

「雅幸とは連絡でも取り合っているのかい？」

「いえ、今日はたまたま店の前で会いました」

「ほう、店で。何か花束でも包んで欲しかったのか？」

「そうですね。けど別のものを買って、贈ろうかと思っています」

修次郎おじいさんたちと顔馴染みになってから、他の花屋には出入りしていないため、他で買う気にはなれなかった。プレゼントをしやすいものとして、花束を第一候補にしていたが、他にも探せば色々ある。

「時間もあるし、とりあえず話でも聞こうか」

だが私の考えとは裏腹に興味津々で聞き返してきた。仕事のことで、気が引き締まったのだろうか。さっきよりも少し目に力が入っている。それにつられて思わず口を開いた。

「二週間後に父と母の結婚記念日があるのです。ちょうど三十周年でおめでたいことだから、子供たちから何か盛大にプレゼントでもしたいなと思い。姉や兄は仕事で忙しいから、私が手配することになったのです」

花でなくてもいくらでも候補があるのは本音だ。夫婦茶碗や湯呑み、食事に連れて行くなど、姉兄に相談すればもっと案はあるだろう。

だから修次郎おじいさんには、この話など忘れて、ゆっくりと休養を取って欲しい。あまり気を使わしても困るので、話をどうにか

逸らそうと試みる。

「でも別に花束に固執しているわけではありませんので、お氣になさらないでください」

「うむ、わかった。話変わるが、咲季ちゃんの誕生日はいつだ？」

「誕生日ですか？ 三月ですが」

修次郎おじいさんから突然話題を変えられるとは思ってもいなかった。特に躊躇いもなく答えると、嬉しそうな顔をされた。

「ありがとう。……なんだ、雅幸のやつ、もう戻ってきたのか。早いぞ」

「部屋を出て、すぐそこところに水道があるのに、何を言っているんだ」

半ば呆れたような顔をしながら、私の横を通り過ぎ、窓側にある小さな机に花瓶を置いた。

そこに活けられた花は、さっきまでぐったりとしていた様子とはまるで別の花であるかのように、生気が戻り始めている。水が上がれば、さらに生き生きとしてくるだろう。

その後、雅幸さんを含めて三人で話を、いや修次郎おじいさんの昔話に適度に相槌を打つような形が続いた。

戦中のことや戦後のことはもちろんのこと、その後も続く、激動の高度経済成長時代、そして会社を定年してから始めた花屋のことまで、過去を懐かしむような表情をしながら、喋り続ける。

「ばあさんは花が好きで、ガーデニングもよくやっていた。定年後、たまたま知り合いに花屋の業者がいて、それを機に始めてみた。まあいい気分転換になったものだ」

けれども、その言葉を出した直後の表情はどこか浮かないものだった。雅幸さんの方を見ると、静かに微笑んでいたが、どこか寂しそうな表情でもある。

気が付けば激しい雨が窓を打ちつけ始めていた。夕立だ。予報が当たったと思いながら、視線を窓から戻すと、苦虫を潰したような顔でおじいさんも眺めていた。

「雨か……。未だに好きにはなれんな」

「私も好きじゃないですよ。動きにくいし、湿気は嫌ですし」

「そういうのも一理あるな」

目をすつと細め、空のどこかに向かって見つめている。おじいさんにとっては他にも何か理由があるのだろう。だが雨が降るたびに憂鬱になってしまうのは、どこか損な気がする。

「けれど、雨が降ることによって気温は下がります。そして水がなければ動物や植物は生きていけません。全面から見ればいいことばかりなのに、たった一つの側面や思い込みだけで、嫌ってしまっただけ、いいことはないですよ」

ふと思いついたことを飾り気のない内容で言ってみる。すると修二郎おじいさんは何かに思い当たったように、口を半分開けて固まっていた。

「修二郎おじいさん、どうかされましたか？」

「いや、大丈夫だ。確かにその通りだなと思っただけだ。——思い出は、思い込みと記憶で作られるものだ。だから、変に記憶に思い込みを刷り込んではいけないな。記憶に悪気はないはずだから」

焦点はどこか収まらず、何かを考えているようにも見える。その様子に雅幸さんと共に軽く首を傾げていた。

やがて夕立も止み、時計を見ると、思った以上に時間は過ぎていた。さすがに帰宅することにし、修次郎おじいさんに軽く挨拶をして、雅幸さんに送ってもらうことになった。行きと同様に助手席に乗り込む。

「店に自転車置いてあるよね。そこまででいい？」

「充分です。ありがとうございます」

そして車を走らせ始めた。その間はあまり話もせず、音楽が流れる中、ただ何となく時間が過ぎていく。

途中、赤信号のため一時停止した。窓の外を見ると、夕陽が建物を照らしている。その様子は温かな気分になれると同時に、どこかもの寂しいものでもあった。

「雅幸さん」

「なんだい？」

声を投げかけると、優しい声で返してくれる。修次郎おじいさんとの話の中で、どこか引つかかっているものがあつた。おそらく話題に出てきていい人が、ほとんど触れられていなかったからだ。

「修次郎おじいさんの奥さん、つまり雅幸さんのおばあさんは、いっつお亡くなりになられたんですか？」

顔色を伺うかのように覗き込むと、顔を俯かせて口を一文字にしていた。そして雅幸さんは目を細めながら口を開く。

「五年前の秋かな、高校三年の時だったから。春に癌が発見されて、延命も試みたけど、結局秋に亡くなった。おじいちゃん、まだ仕事も毎日している時だったから、なかなか見舞いにいけなかったのを、少し後悔しているようにも見えた」

「それはつまり、花屋のシャッターを下ろさなかったのですか？」

「そう。前日まで、仕入れた花を病室に持ってきていた。花を持っていくと、嬉しそうな顔をしていたから、やめられなくなったのかもしれない」

「きつとそれがおばあさんにとっては励みになっていたのでしょうか。おじいさんの手で選び、作った花束を見るのが」

花を愛し続けた老夫婦として、とても素敵な話だと思う。だけどその一方で浮かない顔が気になる。

信号は青になり、雅幸さんは車を走らせ始めた。そこで話は一端途切れてしまう。それ以上話をしようと思ったが、すぐに花屋の前に着いてしまった。

お礼を言って、車から降りる。手を振りながら、走り始める雅幸さんの車を見送った。

蝉がうるさいくらいに鳴き続けている。夕暮れは近いが、まだ汗ばむ陽気続いていた。

四、時を超えた想いを

「百年に一度、咲く花？」

照りつける日差しもピークに達し、お盆を過ぎたころ、何気なくテレビを見ているときに、目と耳に入ったものだ。

百年に一度咲く花というものがあり、私の家の近くの停留所から、バスに乗って行ける植物園にそれがあるらしい。見たことのある風景がテレビに映って、少し興奮してしまった。

昔は植物園など見向きもしなかったが、修次郎おじいさんと出会ってからは、花の美しさや素晴らしさを知り、少しずつ興味を持つようになっていた。だからこのようなニュースを見ると、ついつい視線がいつてしまうのだ。

「早くしないと枯れちゃう。修次郎おじいさんや雅幸さんは見に行くのかな？」

花が好きな二人のことだ、おそらく聞かずとも行くだろう。

修次郎おじいさんは、夏の始めに熱中症で入院したが、お見舞いに行った一週間後に無事に退院できた。しばらく自宅療養となったが、退院してから一週間後に私の家に花束が届けられたのだ、ちょうど両親の結婚記念日に。

雅幸さんが届けてくれたのだが、修次郎おじいさんからの好意であるから代金はいらないと言われた。まさか花束まで、あの体で作ってもらったのかと一瞬焦ったが、花を選んだだけで、あとは雅幸さんがやってくれたらしい。ほっとしたのと同時に、意外にも綺麗な包み方に対して、目を丸くしてしまう。

「僕が作った花束を受け取るのは初めてだからって、そんなに驚かないでよ。一応、休日は僕が切り盛りしているんだから」

そんなことを苦笑いしながら言われたものだ。

やはりヒマワリを中心とした、明るい色でまとめられた花束は、修次郎おじいさんの気遣いと、雅幸さんの丁寧さが感じられる品であった。それを受け取った私はもちろんのこと、両親也非常に喜んでいった。

明日の授業は午前中で終わる。夕方には花屋に顔を出せるだろう。まずは話のネタとして、百年に一度咲くと言われる花を少し調べてみることにした。

翌日、店を訪れると、雅幸さんがちょうど花に水をやっている時であった。修次郎おじいさんは、店内で注文の品である大きな花束を作っている。

「こんにちは、雅幸さん。今日はお二人で、お店に出ているんですか？」

「咲季ちゃん、こんにちは。今、おじいちゃんが花束を作っているだろう。それを宅配するために駆り出されたのさ。普通なら僕は休み」

花屋の近くには雅幸さんの車ではなく、店用のワゴン車が置かれていた。傷も多く、年季が入っている。やがて一通り水をやり終える頃には、花束の方もできあがっていた。

何気なく店内に目をやると、注文表が貼ってあるホワイトボードの隅に新聞の切り抜きも貼られている。そこには昨日ニュースで見た、百年に一度咲くと言われている花のことについてだった。

「あの花は……」

「知っているの？」

雅幸さんに少し驚かれたような顔をされる。

「昨日、ニュースで見たんです。珍しい花ですよ、しかもこの近くの植物園だなんて」

「見たいの？」

突然出された言葉にびっくりし、目を瞬かせる。花が好きだから、というわけではなく、興味程度に気になっているだけだ。

「明日暇なら、一緒に行く？」

そんな思惑をよそに、雅幸さんは提案を差し出された。自力で行くには少し行きにくいところにあるので、車を持っている人から言われて、思わずその内容に飛びつく。

「いいんですか？」

「うん。おじいちゃんも喜ぶと思う。ずっと待っていたんだって、咲くのを。それを大勢で楽しんで見た方がいいじゃないか」

断る理由などない。私は嬉しそうに首を縦に振った。

明日の天気は確か晴れである。きっと思い出に残る、素敵な日になるだろう。

翌日、車で三十分ほど離れたところにある、植物園へと辿り着いた。平日ではあるが、学生が夏休みであるため、園内を見れば比較的人が歩いている。売り場のおじさんが、にこにこした顔でチケットを手渡してくれた。

「いやあ、ニュースまでやってくれたから、有難いことに、今週は人がさらに入っているよ」

「そのニュース、私も見ました。百年に一度、咲く花ですよね？」

「百年に一度は極端すぎだが、珍しい花には変わりないね。熱帯植物の温室にあるから、他のものじっくり見つつ、行ってみるといい」
チケットを受け取ると、ベンチで座っている修次郎おじいさんと雅幸さんの元へと駆け寄った。老体にはこの暑さはよりきついため、風通しのいい服を着て、チェックの帽子はしっかり被っているが、それでも辛そうに見える。

「おじいちゃん、歩ける？」

「何を馬鹿なことを言っている。まだまだ歩けるさ。さて、行くぞ」
念のためにと杖も持っていたが、それを使わずにひよいひよいと

歩き始める。その身軽さに二人は思わず目を見張った。少し進んだところで振り返られ、何をぼうっと立っているのだという無言の視線を突き付けられる。大急ぎで後を追ひ、三人で並んで歩き始めた。温室までは屋外の整えられた道を進む。樹木が上手い具合に木陰となっており、直鎖日光を遮っているので歩きやすい。樹木の脇にその名前が書かれた看板が立っているが、見ても知らないものが多い。店で売られている有名な花や一般的に知られている樹木くらいしか知らないため、植物園などという専門的な分野になるとわからないものだ。

一方、雅幸さんは楽しそうにそれらを眺めつつ、道が何か所か分かれているのに、特に躊躇いもなく温室へと直行していた。

「雅幸さん、ここに来たことがあるのですか？」

「まあね。植物を対象に研究をしているから、こういうのには興味はある。それに昔授業で、木の名前を覚えさせられたからね。おじいちゃんは、初めてだったけ？」

二人に挟まれながら歩く、実年齢よりも若く見えるおじいさんに話しかける。すると目を細めながら、ゆっくりと口を開いた。

「雅幸が産まれるずっと前、ここが開いたばかりの頃に来たことがある」

懐かしんでいるのと同時に、少し哀愁が漂っている顔だ。その表情から、理由を聞かずとも薄々と察することができた。ある人の話を出した時と同じ表情だから。

会話が途切れ、開けた場所に出ると、目の前に温室らしき建物が視界に入ってきた。ドアを開けると、熱気が中から外へと流れていく。熱帯植物を扱っている温室の中は、当たり前だが外の蒸し暑さ以上に暑い。

熱帯と言えばサボテンだと言わんばかりに、まずは大小様々なサボテンが出迎える。面白い形もあるのだなと思いつつ、中に入っていくと、人々で賑わっている場所に出た。

少し距離があるが、それでもその花——リュウゼツランは充分確

認できた。近くに寄って、その姿をよりはっきりと記憶に残す。

非常に背は高く、数メートルもあり、近くに寄っているため、顔を上げてかなり傾斜を付けなければ一番上にある花までは見えない。茎は途中からいくつも分かれて上に伸びており、ある程度に伸びきったところで大量の黄色い花が咲いていた。その花はまるで鳥の巣のようであり、思わず羽休めに使えそうな大きさである。

周りの見学者がカメラで撮っているのを見て思いだし、私も鞆からカメラを取りだし、シャッターに納めた。

「リュウゼツランは百年に一度咲く花と言われているけど、それは大げさすぎる表現で、実際は数十年に一度は咲く花だよ」

すっかり百年に一度と思いこんでいた私は頬を微かに赤らめながら、シャッターを押しまくる指を動かすのをやめた。

「でも、珍しいのには変わりないから、どんどん撮ってもいいと思う」

「あの、可哀想と思って、わざわざ付け足さないで下さい」

「そういうわけじゃない。写真を撮るのは自由だし、撮ろうと思ったときに撮らないと後悔するよ。それにこれでこの花自身の一生は終わりだから、もう同じものは見られない」

「そうですか、そこまで言うのなら遠慮なく撮らせて頂きます」

すでに数枚撮ったが、そこまで促されて撮らないのは逆に失礼すぎるかと思い、カメラを持ち上げてシャッターを再び押す。

「――センチュリープラントと呼ばれるこの花。きつとこういう風に呼んだ人は、生きている間には咲かないと思っていた花が咲いて嬉しかったから、思わず呼んだのだろうね」

「見た目はちょっとびっくりしましたが、色々な想いで溢れている花なんですね。そうだ、良かったら一緒に写真を撮りませんか？

私たちがこの花と同じ時を過ごしていた貴重な証拠ですよ」

「それはいいね。おじいちゃん、写真撮ろうか」

雅幸さんが少し離れたところで眺めている、修次郎おじいさんに話しかけた。だが気づかなかったようで、動かずにそのまま見上げ

ている。何度か呼びかけるとようやく気づき、ゆっくりした足取りで近づいてきた。

「何か用か？」

「咲季ちゃんがカメラを持っているから、一緒に撮らないかって」「こんな老いぼれと一緒に、か？」

「みんなで撮ることに意味があるんだよ。さあ、ちょうど人も少ないし、並ぼう」

私は近くにいた子連れのお父さんに撮ってもらうよう頼むと、快く承諾してくれた。

修次郎おじいさんを真ん中に、私と雅幸さんで挟むようにして並ぶ。そして少し控えめに笑みを浮かべた。

「ハイ、チーズ！」

元気な声と共に、シャッターが押された。

きつと素敵な記念写真として、私や二人のアルバムの中に残り続けるだろう。

その後もゆっくりと園内を散策しつつ、途中でのんびり休憩もしていたら、気が付けば太陽の位置がだいぶ低くなっていた。

そろそろ帰宅をしようという流れになり、植物園から出ようとしたとき、少し後ろを歩いていた修次郎おじさんが雅幸さんに向かって、口を開いた。

「雅幸、少し寄って欲しいところがあるんだが」

「どこだい？」

「ばあさんが眠る寺だ」

はつきりと言い切ったおじいさんの表情は、何かを決心したように見える。しかしなぜ今日行きたいのだろうか。先週はお盆であり、おそらくそのときにも訪れたはずだ。

「別に構わないけど、お線香とか車に積んでいないよ？」

「花だけで構わない。ここ一週間は雨が降っていないから、おそら

く花もくたびれている頃だろう」

「店の花？」

「そうだな。少し遠回りになるがそれが一番有り難い」

「それなら一緒にお線香も持ってこようか」

肩をすくめながら、雅幸さんはおじいさんの意見に賛同したようだ。そして、ちらっと視線が向かれると、何か言いたそうな顔をされた。一瞬、その状況がよくわからなかったが、すぐにその意図がわかった。

「時間ももったいないでしょう。一緒に行っても構わないなら、私も付いていきます」

今日は最後まで修次郎おじいさんといるべきだと、脳内のどこかでそういう指令が下る。

修二郎おじいさんに少し驚かれたような顔をされたが、やがて優しい笑みへと変わった。

夕暮れ時の墓参りなど、ほとんどしたことはない。産まれて間もなくして、おばあちゃんが亡くなった関係で、今でも田舎に行けば墓参りはするが、たいていは昼だ。

少し肌寒くなってきたなど感じながら、墓地へと踏み入れる。

修次郎おじいさんの奥さん、つまり雅幸さんのおばあさんが眠るお墓は、寺の敷地の奥にあった。敷地を広げた早々に作ったのか、周りにはまだ墓石で埋まっていない場所がちらほらある。

さすがに疲れたのだろう、修次郎おじいさんの足下が不安定になり始めていた。昼間は飾りであったはずの杖を、今は突きながら進んでいる。

お墓の前に着くと指摘していた通り、花が入った水は干からびており、花自体も萎れていた。その花を取り去り、桶に入れた水を流し入れる。そして店から持ってきた、夏らしい暖色系の花を差し込んだ。花を変えたただけだが、それだけで一気に華やかになったように思える。

お線香に火を付け、始めに修次郎おじいさんから備える。そして目を閉じ、長い間合掌をした。仲が良かったと言われている二人、長い時間を使って報告をしたいことがあるのだろう。

そしてしばらくしてから合掌をやめて顔を上げると、その表情はどこか満足そうであった。

続けて雅幸さんと私がお線香を供え、軽く周りを水で流す。そんな様子を穏やかな様子で修二郎おじいさんは眺めていた。

どうして今日、訪れたのかはわからなかったが、修二郎おじいさんが満足であるのなら、それでいいのだろう。無暗に人の過去を聞くものではない。一礼をしてから、お墓を後にした。

「……約束していたんだ」

車へと戻る途中、不意におじいさんが先頭をゆっくり進みながら呟いていた。

「ばあさんと植物園に行ったときに、咲くには何十年もかかるあの花を見た。そして約束をした、咲くときは一緒に見ようと。結局わしだけしか見られなかったが、ちゃんと報告したから、満足しているだろう」

雅幸さんはつい足を止めて、前を歩く老人の背中を凝視する。私も思わず歩くのを止めておじいさんを見ると、不思議に思っていた行動が繋がった気がした。

そうか、だからずっとリュウゼツランを話題に出したり、見ているときは寂しそうな顔をしていたのか。なぜなら、今は亡きお婆あさんのことも思い出していたから。

一緒に見られなかったのは確かに残念だが、どちらかが見て、報告ができたのはまだ良かったのかもしれない。どちらも見られなかったりしたら、花は永遠に咲かない存在と認識してしまうかもしれないから。

赤い夕陽がおじいさんを赤々と照らしている。どこか別の場所へと旅立つのではないかと錯覚を覚えるほど、幻想的な一場面であった。

百年に一度咲くと言われている花を三人で見た後から、あまりの夏の暑さに疲れてしまったのだろう、それ以後修次郎おじいさんを店で見るとは少なくなっていた。

五、花に込めた想いを

その年の冬の寒さは厳しく、例年以上に雪も降り、天気が読めない年であった。あまりに天候が悪すぎて大学に行くのが辛い日もあり、必然的に外に出る日数も少なくなる。そうこうしているうちに寒さは和らぎ、春休みに入り、今年もサークルにバイトにほどほどに奔走している日々が続いた。同時に今年は来年度の準備もしつかりしようと思っている。

毎日単調なようであるが、その間でも季節は巡り、新芽に蕾が付き始めていた。寒かった冬も明け、いよいよ様々な花が開く春を迎える。

そんな中、からっと晴れた日曜日に、駅への買い物がてら、少し遠回りして、久々に花屋へと自転車を走らせた。その日の店頭は休日であるため雅幸さんがいたが、どこか浮かない顔をしていた。

「こんにちは、雅幸さん」

声を投げかけると、びくつとしながら、顔を上げられた。

「やあ、久しぶりだね」

「ちよっとバイトやサークルに追われていて。何かあったんですか？」

「うん、まあね」

視線が机の上に行く。それを追って、私もその先のものを見る。そこに書かれていたのは――。

「お店、なくなってしまうのですか？」

それは道を拡大するために、立ち退きを依頼する内容であった。驚きのあまり、口を閉じるのも忘れて、啞然としていた。

「いいや、指定された他の場所に移ることもできるから、なくなる

ことはない。ただもう少し遠くなるから、不便にはなるけど」

「そんな……」

この角の場所でふと通りかかって寄るのが習慣であるので、移転したらしばらくは調子が狂いそうだ。

「まあ補助金も出してくれるし、ここら辺の道がより良くなるのなら、悪い話ではないけどね」

「本当にそうなんですか？　なら、どうしてそんなに浮かない顔をしているんですか？」

訝しげに雅幸さんの顔をじっと見ると、突然微笑まれた。あまりの不意打ちに心拍数が上がる。

「咲季ちゃんの誕生日って、いつだったけ？」

「三月の頭、もう来週ですね。今、聞かれるまで、すっかり忘れていました」

「花が咲き始める、いい季節だね」

その内容に対して控えめに頷いた。誕生日を祝ってもらえるのも嬉しいが、同時に花も咲き始め、さらに心が浮かれる季節である。

そしてある出来事を思い出し、両手を軽く合わせながら口を開いた。「そうだ、今年も是非桜並木を見に行きましようよ。まだ開花時期はわかりませんが、きっと綺麗なはずです」

去年の春、思い悩んでいる時に、修次郎おじいさんと雅幸さんに連れられて一緒に近くの桜並木で綺麗な公園に行ったことを思い出す。写真からでもわかるが、鬱々した気持ちが見るだけで晴れるくらいに本当に美しく、感動した。

嬉々として提案したが、頼りなさそうな顔で辛うじて頷かれる。もはやあまりの気迫がない様子に、困惑した表情を出してしまう。

「雅幸さん、どこか体の調子でも悪いんですか？」

あまりの反応の弱さに言葉を零す。だがそれに対して、首を横に振られる。

「少し寝ていないだけかな。——ねえ、咲季ちゃん、来週もまた来てくれる？」

「来週ですか。サークルの合宿とかがあるので、週末になってしま
いますけど」

「構わないよ。どうせ土日にか店を開けていないから」

「わかりました。では来週の日曜日にも」

意図がよく読めないが、そうはつきり答えることで、雅幸さんの
表情が幾分和らいだように見えた。

忙しさにかまけて、年が明けてから数か月ほど顔を出せていなか
ったが、それでも定期的には会う努力をした方が、相手としては安
心するのもかもしれない。

＊ ＊ ＊

一週間は怒涛のように過ぎていき、金曜に疲労困憊の状態で合宿
から帰り、翌日は休息に一日を当てる羽目になった。

穏やかな天気が続いており過ごしやすい季節だ。そんな季節に産
まれたのは恵まれたことだと思う。誕生日は明日であるが、前倒し
で友達からは祝ってもらい、机の上にはプレゼントとそれを包んで
いた紙で溢れている。髪留めやストラップ、ぬいぐるみなどがたく
さん飛び出していた。

だらだらと一日を過ごしていたが、まだ疲れは取れていないよう
で、夕食後に急激に睡魔に襲われた。やがてベッドに横になると、
すぐに眠りについてしまった。

目の前には大きな植物がそびえ立っていた。先端には何があるの
かと顔を上げると、そこには大量の小さな花が太陽に向かって咲き
誇っている。リュウゼツランだ。

視線を下すと、品の良さそうなおばあさんがすぐ根元で立ってい

た。誰かを待っているのだろうか、時折、辺りを見渡している。

何十年に一度咲く花の下で待ち合わせなど、ロマンチストな人がいるものだと眺めていると、誰かが駆け寄ってくるのが見えた。チェックの帽子を被っているため、一瞬誰であるか判断できなかったが、横顔を見て明らかになった。

「修二郎おじいさんと、おばあさんかしら」

おばあさんが修二郎おじいさんを見つけると、口元を緩めながら迎え入れた。幸せそうな笑顔に、仲がいい老夫婦だと誰から見てもわかる。

ずっと幸せでいて欲しい、そう思わずにはいられない光景であった。

ほんの少しの夢ではあったが、心が温かくなるような満ち溢れた夢を見ていたようだ。

お昼前といつもより早い時間であるが、店の方に行って、修二郎おじいさんがいたら、是非話してあげようと思った。

支度をし終えると、自転車に跨り、走らせ始める。木々を揺らす風が吹いている。春の香りというものが、どのようなものかは分からないが、きっと今感じているものだと思う。

穏やかな春の一日、その言葉がぴったり当てはまる日だ。

視界に、？おおさき花屋？が目に入ってくる。だが意気揚々としていた感情は、いつも通りに開店している花屋ではないことに気づき、急激に冷えていく。

店の前に出している売り物の花が植えてある鉢は出ておらず、シヤッターさえも閉まっていた。そしてその前には一人の青年が視線を地面に向けて、しゃがみ込んでいた。急いで辿り着くと、投げ捨てるかのように、自転車を乱雑に止めて走り寄った。

「雅幸さん、どうしたんですか！」

投げかけた声に気づき、ゆっくり顔を上げると、そこには目を真

っ赤に腫らした彼がいた。そして無言で脇にあった花束を取り上げ、私の前に差し出した。チューリップやスイートピーなど淡い桃色を主としつつも、明るいオレンジ色の薄い花びらを咲かしているアイスランドポピーが目立つ、可愛らしい花束だ。

「これは……」

「……お誕生日おめでとう。僕とおじいちゃんからのプレゼントだ」
「修二郎おじいさんも？ そうだ、今、おじいさんは——」

口走った途端、雅幸さんの歪んだ顔を見て、すぐに後悔をした。なぜ、気づかなかったのか。

いや、なぜ、今まで気づこうとしなかったのかと、過去の自分を疎ましく思った。

気づいていれば、雅幸さんに対する違和感を追及していれば——。花束を受け取ると、自然と涙が溢れ始めた。思わず蹲り、雅幸さんと視線を合わせる状態になる。

「今朝、息を引き取った。夏の終わりからまた体調を崩して、検査をしたら末期癌。もう色々遅かった。けど最後まで花のことは考えていたんだ」

本当は雅幸さんだって泣きたいはずなのに、その感情を押しとどめて、私に伝えようとしている。だからできる範囲で涙を堪えようとしたが、流れ始めたものはなかなか止まらなかった。タオルを差し出され、ほんの少しだけ躊躇ったが、すぐに受け取り有り難く使う。

「土日だけでもいいから店を開けて欲しいと言われた。そして注文は受けて、その花束はなるべく自分が花を選ぶって意気込んでいた。今渡した花束も考えて、選んだのはおじいちゃんだ——最後の花束を」

包み方等は修二郎おじいさんの丁寧さと比べると程遠いが、雅幸さんらしい包み方だ。？最後の？という言葉が胸に響く。

「おじいちゃん、言っていた。おばあちゃんが亡くなってから、どうしてすぐに後を追わなかったのかという理由を。リュウゼツラン

をこの目で見て、天国で報告をしたかったからだって。だから見た後に気が抜けたように、体調が悪くなったんだ」

朝見た老夫婦の夢は偶然ではなく、修次郎おじいさんの思考によって見させられたものかもしれない。

そう思うと、いつまでも涙を流すわけには行かなかった。タオルを顔に当て、出ているものを無理矢理拭う。そしてどうにかして、微笑む。

「なら修次郎おじいさんは、頑張ってより長く生きてくれたということですよ。数年前にただおばあさんの後を追うのではなく、二人でできなかったことを、一人でも達成するために」

「長生きか。そうだね。もしすぐに後を追っていたら、おじいちゃんも僕も咲季ちゃんとも出会うことはなかったし」

「私と、ですか？」

「ここの花屋はおじいちゃんだけの一代限りで店を閉める。だからおばあちゃんの後をすぐに追っていたら、咲季ちゃんと出会う前に閉めてしまっただろう。――そうそう、おじいちゃん、よく咲季ちゃんには感謝しているって言っていた」

思わぬ言葉に目を丸くする。一瞬慰めのための嘘だと思ったが、真っ直ぐに見つめてくる瞳はまったく揺れていなかった。

「若い子が花に興味を持っていく様子が嬉しかったらしい。そして花に想いを込めて、プレゼントとして買っていく様子も」

「そんな、私以外でもそういうことをする人はいると思いますよ」

「でもおじいちゃんにとって、一番心を許せた人は咲季ちゃんで、そしてあることに気づかせてくれたのも咲季ちゃんだったんだ」

「私が修二郎おじいさんに？」

何も心当たりがない。むしろ助けられてもらったほうが多い。私が首を小刻みに横に振りつつも、雅幸さんはゆっくりと私の想いを否定するかのように首を横に振った。

「おばあちゃんが亡くなった日は雨が降っていて、そのために到着が遅れたんだ。だからそれ以来、おじいちゃんは雨の日がより嫌い

になった。けどおばあちゃんは雨の日は好きで、静かで、心が鎮まるような雰囲気が好きだって言っていた。そして、それをようやく理解したらしいんだ、咲季ちゃんの言葉で」

雅幸さんの目が花束の方に向けられる。

「――わだかまりが一つ消えたことに、そして他にも多くのわだかまりや、思い出を作ってくれた咲季ちゃんに伝えたかったんだ、花束で。花に込めた最後の想いを」

改めて花束に視線を落とす。淡い色で構成された優しい気持ちになれる花束。いい香りもし、嗅ぐと幸せな気分になれる。

無理して微笑んだ雅幸さんを見ると、修二郎おじいさんが一瞬重なる。

「おじいちゃんがよく言っていたのは、女性はまさしく花だって。棘を持っているものもあるけど、たいていが人々の心を癒してくれる。そしてその花の中にはそれぞれ言葉が込められており、同時に人々の想いも含まれている。例えば、アイスランドポピーには？ 高い精神？ という言葉が込められているように。そんな風にずっと生き続けて欲しいという想いがあったからじゃないかな」

花束を握る力が強くなる。これを受け取って感じたことは、なんて綺麗で、優しい気持ちになれる花束なのだろうかということ。だけど、それだけでなくその奥に秘められた言葉が私の心を突く。

私はそんな風になれるのだろうか。それともなれているのだろうか。

でも、今、これだけは言えることがある。

修二郎おじいさんの想いはしっかりと私の心の中に埋め込まれたということに。

春の訪れを告げる、暖かな風が吹く。付き始めた葉を揺らし、虫たちが現れ始める。

まるで、優しくかった修二郎おじいさんの心の中にのように、穏やかな空だった。

＊ ＊ ＊

修二郎おじいさんの四十九日を迎えた頃、しばらくあの地から離れていたが、精神的にも落ち着いてきたので、久々に？おおさき花屋？の前を通りかかろうと、自転車に乗った。

訃報を聞いた当初は花束を見るたびに、表現しきれない切ない想いが込み上げてきていた。前を向いて元気にいて欲しいのだろうが、心の中にできた空虚感はなかなか埋められなかった。

花束を、始めはドライフラワーにでもして、ずっと保存していようかと思ったが、それでは本当の美しさを見ずに終わってしまう。だからアイスランドポピーを一本だけドライフラワーにして、あとは花瓶に入れた状態で一週間以上眺めていた。だんだんと枯れてきてしまうのは寂しいが、果敢にも咲いている姿を見ると、私も元気になりそうだった。

この先を真っ直ぐ行けば、角に店が視界に入ってくる。シャッターは閉まったままであろうが、外観だけでも見られるだろうと、その時点までは思っていた。

だが何か違和感がある。目を細めて、先まで見ようとすると、途中で啞然としてしまった。

数メートル前で自転車から降り、押していくと、おおさき花屋があった場所は――更地になっていたのだ。

周りの建物も一緒に壊されたのだろう、一回り大きな空間ができていた。

「本当に無くなっちゃった」

四十九日は、生きている人が亡くなった人に対して心の整理を付けるためにあるのだと聞いたことがある。その内容は確かに私自身にも当てはまることで、この期間のおかげでだいぶ気持ち的には楽になっていた。

だが急にあったものが無くなってしまおうというのは、やはりどこか物寂しい。

更地になった場所に足を踏み入れる。そして周りを見渡した。住宅街であるから、近場はそこまで変わりはないが、少し離れたところには十年までは見られなかった高層ビルが建っている。そのビルの近くには並木通りがあり、それは変わっていない。

変わるものがあれば、変わらないものがある。

この、？おおさき花屋？があった地は変わる場所であったのだ。四十九日は心の整理だけでなく、立ち止まっていた場から、進み始める期間でもあった。

花が美しいと感じられるのは、同じ様子を常に保ち続けるわけではないからだ。時が経てば、花は枯れるだろう。だが次の世代を残すことで、想いは続いていく。

それは想いが途切れない限り、ずっと続いていくだろう。

その日の空もどこまでも、どこまでも真っ青な青空であった。

了

五、花に込めた想いを（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

ファンタジーやミステリー要素は一切なく、恋愛もほぼないといった、ある女性とおじいさんとその孫との日常の交流を描いた小説でした。

無理なく穏やかな展開で最後まで持つて行ってしまったので、他の小説とは違った印象を受けるかもしれません。

自分としましては、「死」というものを真正面から感じ、それを受けた結果書いた一作となります。

一方、随所に花もあしらいましたが、一話ごちに主となるものが違います。

一押しは、4のリユウゼツラン。実際に見たときは、あまりの迫力に驚いた覚えがあります。

最後に拙作を読んで、何か少しでも感じるところがあれば幸いです。

今後もさらにより良いものが書けるよう、頑張りたいと思います。ありがとうございました。

桐谷瑞香（二〇一一・〇八・一六）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8452v/>

貴方に贈る花

2011年8月16日03時13分発行